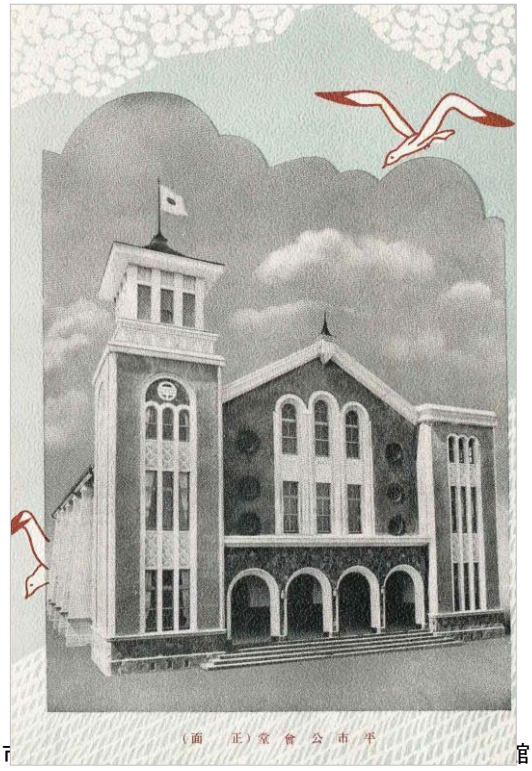
待望の「平市公民館図書部」が開館

「いわき総合図書館」の前身となったのは、昭和23（1948）年8月23日に開館した「平市公民館図書部」です。いわき市が発足したのは、昭和41（1966）年10月ですから、当時はまだ平市でした。それまでも、諸橋元三郎の「三猿文庫」をはじめ、「海外協会佑賢図書館」など、私立図書館・文庫はいくつかありましたが、市立図書館としてはこれが最初となりました。

平市公民館図書部の開館を報じる当時の『いわき民報』（昭和23年8月20日付）には、「閲覧は午前八時から午後三時までで貸出はしない方針」、「予算の関係で目下書籍も月刊雑誌に限られている」とあり、本格的な図書館というよりも、図書コーナーといった規模やサービスでのスタートであったようです。

場所は平市公会堂の2階で、当時、平市公会堂は、平市役所の仮庁舎として使われていました。現在の市文化センター北隣の葬祭場「さがみ典礼 いわき迎賓館」（旧大黒屋デパート跡）が、平市公会堂跡になります。



平市公民館図書部が開館した。（「平市公会堂竣功記念絵葉書」 昭和13年）

ちなみに、日本における公共図書館の設置は、明治32（1899）年に「図書館令」が公布されたことで進められます。

福島県内の図書館で最も古い公立図書館は、明治37（1904）年に開館した会津若松市立会津図書館です。福島市立図書館は明治41（1908）年、福島県立図書館は昭和 4（1929）年の開館ですから、いわき地方における公立図書館の設置は、他の地域に比べ遅れたことがわかります。

当時も、図書館建設の声はあがりましたが、実現までには至りませんでした。ですから、市民にとっては待望の図書館開館だったのです。それは、開館後の利用者の増加からも知ることができます。

その後、平掻槌小路の私立平陽女学校跡、平堂根町の市文化センターへの移転を経て、平成19（2007）年10月25日、いわき駅前再開発ビル「ラトブ」の4・5階に、いわき総合図書館が開館しました。

公民館圖書部店開き
いよ〳〵益明の二十三日から

市役所二階特別室に店開を準備中だつた公民館圖書部は二十三日よりいよ〳〵一般に開放する、閲覧は午前八時から午後三時まで、貸出はしない方針、利用希望者は同圖書室に備えてある申込書に記入して係に提出すれば良い、閲覧は無料

なお豫算の關係で目下書籍も月刊雑誌に限られているので今後は市民から寄贈の書附を仰ぐことになつておりこの第一回寄附金として市内マルトモ書店主柴田憲二氏より輸書約二百冊の寄贈申出があつた、

『いわき民報』（昭和23年8月20日付）

昭和26年頃の平駅前（『平市勢要覧　昭和26年度版』）

「平市公民館図書部」から「いわき市立平図書館」へ

平市公民館図書部は、平市公会堂の 2 階で業務を行っていましたが、昭和 27（1952）年 4 月、平市公会堂隣に平市公民館が建設されたことに伴い公民館内に移転します。

一方、昭和 13（1938）年の開館以来“文化の殿堂”として市民に親しまれてきた平市公会堂は、建物の老朽化と接する国道 6 号の交通量の増加に伴う騒音のため、昭和 41（1966）年 4 月に廃止となってしまいます。同年 12 月には、平市公会堂の敷地は公民館の敷地も含めて旧大黒屋デパートに売却されました。

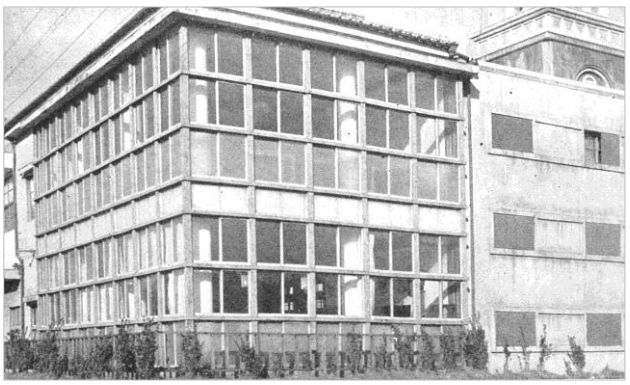
また、昭和 41 年 10 月にはいわき市が発足し、名称を「いわき市立平公民館図書部」と変更しました。

旧大黒屋デパートに売却された後も、公民館図書部は移転先が決まるまでのしばらくの間、間借りという形で同地で図書館業務を行っていました。移転先を巡っては、独立型図書館の設置を求める声があがりますが、当時のいわき市は合併後の財政難を抱え、新規事業へ着手が困難な状況でした。

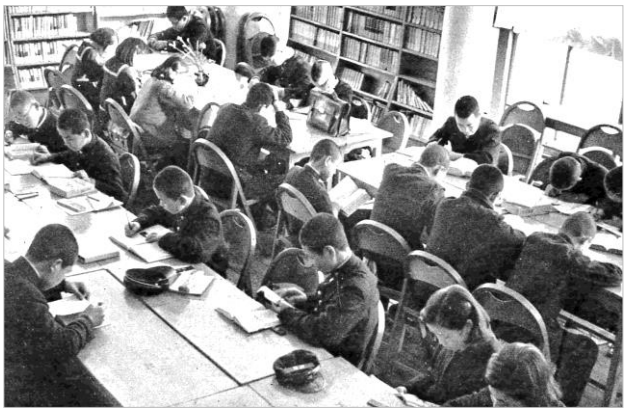
とはいえ、社会教育の基盤である公民館がいつまでも間借りという訳にもいかず、昭和 43（1968）年 7 月、市は暫定移転という形で、平掻槌小路にあった私立平陽女学校跡に公民館と図書部を移転することにしました。ここで暫定移転としたのは、将来的には独立公民館と図書館の建築を目指していたからです。

平掻槌小路への移転に伴い、平公民館図書部は独立運営となり、名称を「いわき市立平図書館」と変更しました。当時の蔵書数は 2 万 5,000 冊、年間利用者は延べ 1 万人を超えていました。

なお、平掻槌小路への移転は、独立公民館・図書館の新築までの暫定移転のはずでしたが、新館開館は 7 年後の昭和 50（1975）年 5 月の市文化センター（平堂根町）のオープンを待たなければなりませんでした。



平市公会堂に隣接していた平市公民館
（『平市勢要覧　昭和 30 年度版』）



平市公民館図書部　館内（『平市勢要覧　昭和 30 年度版』）

平公民館を暫定移転

広い元平安学院校舎へ

近い将来に本建築を

『いわき民報』（昭和 43 年 2 月 1 日付）

揺槌小路の「いわき市立平図書館」

平図書館の移転先となった私立平陽女学校は、明治38（1905）年3月、私立女子裁縫学校として平町字田町に設立されました。明治39（1906）年4月、私立平陽裁縫女学校と改称します。その後、生徒数の増加で校舎が手狭となったことなどから、大正13（1924）年3月、私立平陽実科女学校へ改称されたのを機に、平図書館の移転先となる常磐線稲荷山トンネル北東側（揺槌小路20番地）に移転改築しました。昭和3（1928）年4月には、文部大臣の認可を受け私立平陽女学校と改称しますが、昭和20（1945）年7月、県立平女子商業学校（現 県立平商業高等学校）に転用する際に廃校となりました。

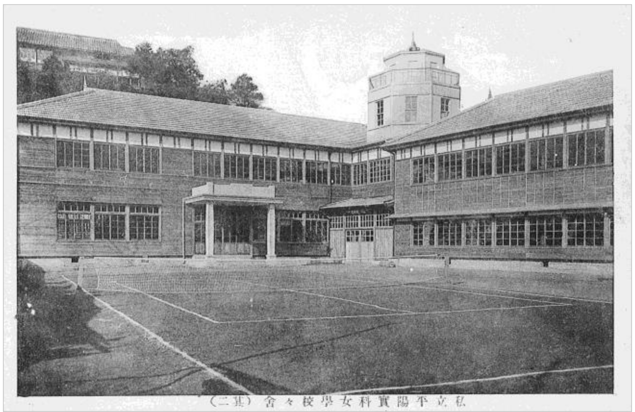
廃校後の校舎は、平女子商業学校が昭和22（1947）年6月まで使用し、その後は、県立平盲ろう学校や、国立平工業高等専門学校（現 福島高専）などが使用していました。また、昭和43（1968）7月に、平公民館、図書館が移転する直前には、火災で校舎が焼失した市立平第二中学校が、仮校舎として使用していました。

図書館は1階で業務を開始し、うち2部屋を書庫に、閲覧室は100㎡あり、移転前の1.5倍となる約60人を収容できるようになりました。

昭和46（1971）年7月には、金曜日と土曜日の開館時間の延長を行い、金曜日は午後4時から午後7時に、土曜日は正午から午後5時に延長し、サービスの拡充を図ります。

同じ頃、公民館利用を促進する動きもあり、平公民館ではサークル活動が急増しました。その結果、施設が手狭になり、市民が思うように利用することができなくなりました。また、当時すでに築50年近く経っていた建物だったため、暖房設備や防火設備の不備なども問題視され、早期の中央公民館建設を求める声が日に日に高まっていきました。

そんな折、『いわき民報』（昭和46年7月23日付）のトップ記事で「48年度に着工 こんどは中央公民館 図書館も併設の意向」と報じられます。中央公民館建設が具体的に発表となったのは、これが初めてでした。その後計画が進み、市文化センターが昭和50（1975）年5月2日にオープンしました。建設用地確保の問題や、いわき市合併による財政悪化など、いわきの過渡期にあったことが図書館の移転問題を複雑にし、その結果、平揺槌小路への“暫定移転”から、市文化センター移転まで7年を要したのです。



揺槌小路へ移転した頃の私立平陽女学校。
図書館は、昭和43年7月から昭和50年3月まで使用していた。（大正13年発行）

私立平陽女学校の跡地は、現在駐車場になっている。（平成26年1月　いわき総合図書館撮影）

文化センターに移転の準備
24日から2カ月休館
平 公民館 図書館

市民待望の"いわき市文化センター"工事は順調に進み、現在最後の仕上げとして内部設備に取りかかっている。これに伴い平公民館、平図書館は同センター内に引っ越しすることから、二十四日から五月十二日までの約二カ月間、閉館することになった。

文化センターのオープンは五月二日午前十時から大ホールで落成式を行い、市民に開放することになっている。二日から十一日までは「文化センター落成記念行事」として、市内の文化団体や社会教育関係団体が発表会、展示会を計画しているため、正式な市民開放は五月十二日以降になるという。

記念行事は市内の各団体から二十五日まで募っており、参加申し込みによってプログラムなどを決めることになっている。同発表や展示会は入場無料が原則。

この文化センターオープンに伴い、平公民館、平図書館が同センター内に中央公民館、中央図書館として移転することから、その準備や整理のため、二十四日から五月十一日まで閉館される。ただ、現在同公民館で実施している市民学校、教室、それに同公民館を利用している各種団体、サークルは活動ができなくなるので、公民館だけは文化センター内の中央公民館の使用を繰り上げ、会議室に限り四月七日から利用させる方針でいる。なお、落成式典後の「こけら落とし」には平おかあさんコーラス、永野美佐子さんのピアノ独奏が予定されているほか、記念行事は三十一日に決めるという。

現在の平公民館・図書館は借地借家で、三月末の契約切れと同時に市は再契約をしないが、同建造物は県立平盲ろう学校と光象時代から福島高専、昌平黌短大、平二中（火災時）そして平公民館と長年恩恵を受けてきている。

【市と縁がなくなる平公民館建造物】

『いわき民報』（昭和50年3月19日付）

市文化センターオープン「いわき市立中央図書館」開館へ

市文化センターは、昭和 48 年度から 13 億 8,000 万円をかけて建設され、昭和 50（1975）年 5 月 2 日、待望のオープンとなりました。

地下 1 階、地上 6 階建で、1 階には 580 席を備えた大ホールを配置。6 階には児童科学館があり、当時としては県内最大規模のプラネタリウム 245 席と天文台を備え、子どもたちの夢を育てる施設として連日、見学者でにぎわいました。

図書館は、4 階に一般書、5 階に児童書を配置しました。また、移転に伴い「いわき市立平図書館」から「いわき市立中央図書館」へ名称を変更し、昭和 50（1975）年 5 月 3 日に開館しました。

開館時の蔵書数は、平図書館の 2 倍以上に当たる 2 万 8,509 冊（うち児童書は 4,115 冊）でしたが、利用に追いつかず、蔵書不足が指摘されました。

開館時間は、月～木・土が午前 9 時から午後 4 時半、金曜日は午前 9 時から午後 7 時までで、休館日は、日曜祝日のほか、毎月 1 回でした。

貸出冊数は 1 人 3 冊、14 日間（それ以前は 1 人 2 冊、10 日間）となりました。

オープン当時のにぎわいを伝える当時の『いわき民報』（昭和 50 年 5 月 12 日付）には、「文化センターに 3 万 4,000 人 9 日間に市民の一割」とあり、多くの市民が押し寄せたことがうかがえます。

図書館も、開館 5 日間で 913 人が新規登録し、1,691 冊を貸出しました。平図書館時代の 1 日の平均利用者 30 人、50 冊程度の貸出に比べると、飛躍的な利用増になったのです。

その後も、利用者は日を追うごとに増加しました。特に児童書の貸出が多く、1 ヶ月もすると児童室の約半分の本が貸出され、書架が空いてしまう事態となってしまいました。本がないため、ガッカリして帰る子どもの姿もあったそうです。

中央図書館時代は、日曜開館の開始、点字・録音資料の貸出開始、国際資料コーナーの設置、図書館情報システム導入など、サービスの拡大期となりましたが、平成 19（2007）年 10 月 25 日、いわき駅前再開発ビル「ラトブ」への移転に伴い、32 年の歴史に幕を下ろしました。

昭和50年／1975年
4月1日（第106号）
発行―福島県いわき市
編集―総務部広報課
〒970 いわき市平字梅本21
電話(平)0246 22-1111

広報いわき

私たちのマチ
（昭和50年3月1日現在）
男……159,529人
女……170,423人
計 329,952人
世帯数 84,808

毎月1回1日発行（定価1部6円）
昭和45ニ7月2日 第3種郵便物認可

心ふれあう
文化の殿堂

「文化センター」完成

文化センターがこのほど完成し、五月二日にオープンの予定です。

この文化センターは、いわき市に隆盛的な文化の殿堂を築こうと、昭和四十八年度から旧平支所跡、約五千六百平方メートルの敷地に約十三億八千万円をかけ建設してきたものです。

建物は、文化の殿堂にふさわしく白亜の壁がまぶしい地下一階、地上六階（塔屋二階）建てで、内部には文化会館、中央公民館、中央図書館、児童科学館などがあります。

特に、休日の不自由な方でも車椅子で利用できるよう玄関をスロープ化するなどキメの細かい設計がなされました。また、市では初めてのプラネタリウムや直径二十センチの望遠鏡のある天文台なども早くも人気の的となっています。

（関連記事は二面に）

5月2日オープン
気軽にご利用を…

『広報いわき』（昭和 50 年 4 月 1 日付）

市文化センター落成式（昭和 50 年 5 月 いわき市撮影）

中央図書館モテモテ

旧館時代の6倍利用

市文化センター内の中央図書館は三日に開館し、七日までの五日間で九百十三人が登録をして、千六百九十一冊の本を貸し出すなどの関係から、一日平均三十人の利用状況に関係者はホクホク。

これまでの本貸し出しは平図書館で実施してきたが、政置場所ならう利用と本貸し出しも五十冊程度だったことから、中央図書館の利用は六倍以上に達している。

利用者の中には弁当持参で訪れる人、本を借りるのに一人三冊まで（従来二冊）に増えたので、本人と妻、子供の分まで登録して、九冊も借りる人もいるという。なお、開館第一号の利用者は磐女三年の若狭浩江、市川久美子、大八木智子さんの三人だった。

【にぎわう中央図書館受付】

『いわき民報』（昭和 50 年 5 月 9 日付）

中央図書館ものすごい利用

児童用書架は空っぽ

一月で旧平の一年分貸出

いわき市文化センターの完成に伴い、平図書館を中央図書館として同センター内に移転したが、開館以来一カ月間で貸出冊数が九千冊を超えたり、とくに児童書は開館早々貸出冊数の多くにあたる約一千冊が常時貸し出されて枯り、書架はガラあきの状態。なかには「つかの間に来ても、本がないためガッカリして帰る児童もおり、図書の充実を求める声が高い。

開館時間は毎週、月、火、木、金曜日の午前十時から午後六時、水、土曜、学生などは午後五時までとなっている。

開館初日の一月七日、この日から常用の図書館用登録を行なったところ、一日平均三百人、約二万五千冊平ていど、貸出、入館者は三百十三人。

一方、図書数が少ないにもかかわらず、借り手が多く貸し出されている。常時図書は五千三百八十二冊、次いで文学の三千七十七冊、芸術の三百四十九、とくに児童図書は約千冊。

整理は、中央図書館の設置以来、一月間で貸出冊数は平均三千冊、一日平均一冊の割合で本を借りていることになる。これは図書館開館年一年間にしかも図書、〈二万百三十一冊〉に匹敵する。

図書は「現代の児童図書室の書架」

【ガラあきの児童図書室の書架】

子ばかりでは足いらずだ。児童の図書は大人向上のものがあるとも思めてアタリしていないが、半面、図書不足は否定できない。

『いわき民報』（昭和 50 年 6 月 6 日付）

中央図書館（昭和 51 年 4 月 いわき市撮影）

中央図書館（昭和 51 年 4 月 いわき市撮影）

中央図書館 児童室（昭和 51 年 4 月 いわき市撮影）

中央図書館 児童室（昭和 51 年 4 月 いわき市撮影）

中央図書館 日曜開館スタート

市文化センターの中央図書館時代は、図書館サービスの拡大期となりました。

現在では、利用したいときにいつでも開館している図書館ですが、日曜日も開館するようになったのは、昭和 56（1981）年 1 月 11 日からで、中央図書館に限定しての実施でした。

中央図書館が開館して間もない頃から、日曜開館を要望する声がありました。当時の『いわき民報』(昭和 54 年 12 月 28 日付）には、いわき市社会教育委員の会議で、日曜開館と開館時間の延長、四倉・久之浜地区への図書館新設などを教育委員会に対し要望したことを報じる記事が見られます。

しかし、日曜開館については、職員配置の問題や、司書の専門職としてのスキル向上の必要があり、先延ばしになっていました。

そんな折、昭和 55（1980）年のいわき市議会 6 月定例会において、当時の松本久教育長が、市立図書館 5 館の日曜開館年内実施の方針を明らかにしました。また、同年 7 月 1 日、市は行政機構改革を行い、図書館も日曜開館を想定して職員の増員が図られました。

日曜開館問題に最終的な結論が出たのは、同年のいわき市議会 12 月定例会です。「来年（昭和 56 年）1 月から中央図書館の日曜開館を実施することに決定した」と当時の田畑金光市長が答弁したことで、中央図書館に限定して日曜開館を実施することが明らかになりました。

小名浜、勿来、常磐、内郷の地区図書館（四倉図書館はこの時は未設置）に関しては、「職員数、施設改善問題などからみて現状では無理」としました。地区図書館が日曜開館を開始したのは、12 年後の平成 5（1993）年 3 月 1 日のことでした。

市民の念願だった日曜開館の初日は、多くの利用者がつめかけました。当時の記録によれば、来館者は 1,141 人、貸出冊数は 1,231 冊と、開館以来最高を記録。勤め人や親子連れなど、平日は利用できない人たちが多く訪れ、熱心に本を選ぶ姿が新聞で報じられました。

『いわき民報』(昭和 56 年 1 月 12 日付）

『いわき民報』(昭和 56 年 1 月 29 日付）

図書館情報システムの導入

日曜開館とならび、市立図書館の大きな変化として、「いわき市立図書館情報システム」（以下 システム）の導入があります。

それまでは、手書きのカード目録で本を検索し、貸出・返却もすべて職員が手作業で行っていました。貸出票が見つからない、ということもしばしばあり、返却日もスタンプで１冊１冊手押しでしたから、システムの導入は市立図書館の歴史に残る大事業だったといえます。

市立図書館が、システム導入へ動き始めたのは、平成９（1997）年でした。当時、人口 30 万人以上の自治体で、貸出などの業務を手作業で行っていたのはいわき市だけで、利用者サービス向上のためにも、システム導入は急務となっていたのです。

システム移行準備のため、平成 10（1998）年９月より市内６図書館を順次休館し、平成 11（1999）年 10 月 26 日、「いわき市立図書館情報システム」が稼働しました。システム導入により、貸出・返却作業も大幅にスピードアップし、貸出冊数も１人３冊から５冊へと増えました。また、それまで本の利用状況などは各図書館がそれぞれ管理していましたが、システム導入により市内６図書館がネットワークで繋がり、他館の利用状況がリアルタイムで把握できるようになったのです。

また、システム稼動に伴い「いわき市立図書館ホームページ」も開設され、いつでも図書館と繋がることができるようになりました。

図書館情報システム稼動式（平成 11 年 10 月 いわき市撮影）

図書館電算化へ始動

情報検索などに威力

22日に第1回推進委員会

人口30万都市以上

手作業いわきだけ

『いわき民報』（平成９年５月 10 日付）

蔵書情報をセットアップ

市立図書館

11年度に業務電算化

貸し出し・返却が迅速に

市新年度予算案から

6館が1つの図書館に

『いわき民報』（平成 10 年３月 18 日付）

総合型図書館構想　「21 世紀の森」から「まちなか」へ

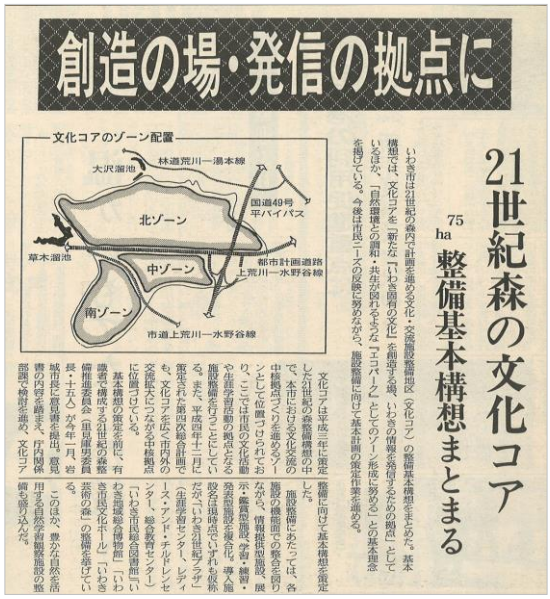
「「個」のある図書館、「輪」をつくる図書館」をコンセプトに、中心市街地の賑わい創出の場と期待をうけオープンしたいわき総合図書館ですが、当初は常磐地区の 21 世紀の森公園内に建設される予定でした。

平成 3（1991）年 2 月、市は、平、小名浜、常磐の市街地に囲まれた丘陵地に、緑豊かな市民のふれあいの拠点を造る「21 世紀の森整備構想」を策定します。この 21 世紀の森のゾーンニングのひとつとして、平成 6（1994）年 2 月「文化・交流施設整備地区(文化コア)整備基本構想」が策定され、21 世紀の森整備区域内の文化・交流施設整備地内に「(仮称)いわき市民総合図書館」として整備する方針が打ち出されます。

当時、日本はバブル景気に沸き、地方財政も潤っていました。文化センターの中央図書館が手狭になっており、関係者から新しい独立型図書館の建設要望もあったことから、新図書館の建設機運は盛り上がります。

しかし、バブル崩壊など社会状況の著しい変化をうけ、平成 10（1998）年 7 月頃より「文化コア構想」を見直すことになります。また、同じ頃、「中心市街地の活性化に関する法律」（平成 10 年 6 月）が公布され、コンパクトシティや公共施設の市街地への整備などが注目されるようになりました。

少子高齢化の進展、中心市街地の空洞化、景気の長期低迷、市民ニーズの多様化など、社会経済情勢が急激に変化し、特に大規模事業は効率性、事業効果への慎重な配慮が求められるようになっていました。このような社会情勢の変化をうけ、平成 11（1999）年 4 月、「文化コア構想」に結論が出され、市民生活に身近な図書館や文化ホールなどは、中心市街地へ整備する方針が示されました。図書館は平一町目周辺への整備が検討されていました。



創造の場・発信の拠点に

21世紀森の文化コア

75ha 整備基本構想まとまる

いわき市は21世紀の森内で計画を進める文化・交流施設整備地区（文化コア）の整備基本構想をまとめた。基本構想では、文化コアを「新たな「いわき固有の文化」を創造する場、いわきの情報発信するための拠点」としているほか、「自然環境との調和・共生が図れるような「エコパーク」としてのゾーン形成に努める」との基本理念を掲げている。今後は市民ニーズの反映に努めながら、施設整備に向けて基本計画の策定作業を進める。

文化コアは平成三年に策定された21世紀の森整備構想の中で、本市における文化交流のゾーンとして位置づけられており、ここでは市民の文化活動や生涯学習活動の拠点となる施設整備を行うことにしている。また、平成四年十二月に策定された第四次総合計画でも、文化コアを核で市内外の交流拡大につながる中核拠点に位置づけている。

基本構想の策定を前に、有識者で構成する21世紀の森整備推進委員会（重田康男委員長・十五人）が今年一月、岩城市長に意見書を提出、意見書の内容を踏まえ、庁内関係部課で検討を進め、文化コア整備に向けて基本構想を策定した。施設整備にあたっては、各種の機能面での整合を図りながら、情報提供型施設、展示・鑑賞型施設、学習・練習・発表型施設を総合化、導入施設名は現時点ではいずれも仮称で、「生涯学習センター、レディース・アンド・チルドレンセンター、総合教育センター」「いわき市民総合図書館」「いわき市民文化ホール」「いわき芸術の森」の整備を進めている。

この ほか、豊かな自然を活用する自然学習観察施設の整備も盛り込んだ。

平成五年度末に長崎、ほたるお台場のストップした状態になっている21世紀の森の文化・交流施設整備地区（文化コア）の整備構想、いわき市は昨年から、構想の見直しを含め市内整備計画に組み入れている。その結果、自然と調和の図れる複合施設、文化ホール中心市街地に配置すべきとの結論が出され、三十八日、市議会の各派代表会議に報告された。市では今後、各施設の基本的な方向性などを検討していく。

文化コアは21世紀の森の平上荒川字熊下、草木、大沢、荒蒔字荒作と、面積七十五ヘクタール。基本構想では、北、中、南の三ゾーンに分かれ、北には21世紀の森公園内の文化センター、レディーズ・アンド・チルドレンセンター、中央図書館、ホールを結び、中央ゾーンは商業、レストランなど利用者の利用を考慮した施設が計画されていた。

計画では、まず、ホールの建設を行い、二期として21世紀の森整備推進委員会（重田康男委員長・十五人）が今年一月、岩城市長に意見書を提出、意見書の内容を踏まえ、庁内関係部課で検討を進め、文化コアの整備に向けて基本構想を策定した。

その結果、文化コア内には、自然と調和する複合施設、文化ホール、展示・鑑賞型施設、学習・練習・発表型施設を総合化、導入している施設の名称は、現時点ではいずれも仮称で、「生涯学習センター、レディーズ・アンド・チルドレンセンター、総合教育センター」「いわき市民総合図書館」「いわき市民文化ホール」「いわき芸術の森」の整備を進めている。

この ほか、豊かな自然を活用する自然学習観察施設の整備も盛り込んだ。

『いわき民報』（平成 6 年 3 月 30 日付）

「文化ホールは中心市街地に」

文化コアの21世紀森見直しで結論

市 総合図書館も街に

平成五年度末に長崎、ほたるお台場のストップした状態になっている21世紀の森の文化・交流施設整備地区（文化コア）の整備構想、いわき市は昨年から、構想の見直しを含め市内整備計画に組み入れている。その結果、自然と調和の図れる複合施設、文化ホール中心市街地に配置すべきとの結論が出され、三十八日、市議会の各派代表会議に報告された。市では今後、各施設の基本的な方向性などを検討していく。

文化コアは21世紀の森の平上荒川字熊下、草木、大沢、荒蒔字荒作と、面積七十五ヘクタール。基本構想では、北、中、南の三ゾーンに分かれ、北には21世紀の森公園内の文化センター、レディーズ・アンド・チルドレンセンター、中央図書館、ホールを結び、中央ゾーンは商業、レストランなど利用者の利用を考慮した施設が計画されていた。

計画では、まず、ホールの建設を行い、二期として21世紀の森整備推進委員会（重田康男委員長・十五人）が今年一月、岩城市長に意見書を提出、意見書の内容を踏まえ、庁内関係部課で検討を進め、文化コアの整備に向けて基本構想を策定した。

その結果、文化コア内には、自然と調和する複合施設、文化ホール、展示・鑑賞型施設、学習・練習・発表型施設を総合化、導入している施設の名称は、現時点ではいずれも仮称で、「生涯学習センター、レディーズ・アンド・チルドレンセンター、総合教育センター」「いわき市民総合図書館」「いわき市民文化ホール」「いわき芸術の森」の整備を進めている。

この ほか、豊かな自然を活用する自然学習観察施設の整備も盛り込んだ。

『いわき民報』（平成 11 年 4 月 28 日付）

文化・交流施設整備地区イメージ
（『いわき市文化・交流施設整備地区基本構想策定調査報告書』より）

「いわき市立いわき総合図書館」オープン

市は平成 11（1999）年 7 月、「いわき市中心市街地まちづくり基本計画」を策定します。この基本計画で、いわき駅周辺地区は都市核のひとつとされており、平成 13（2001）年 1 月には、いわき駅周辺に総合型図書館を整備する方針が示されます。

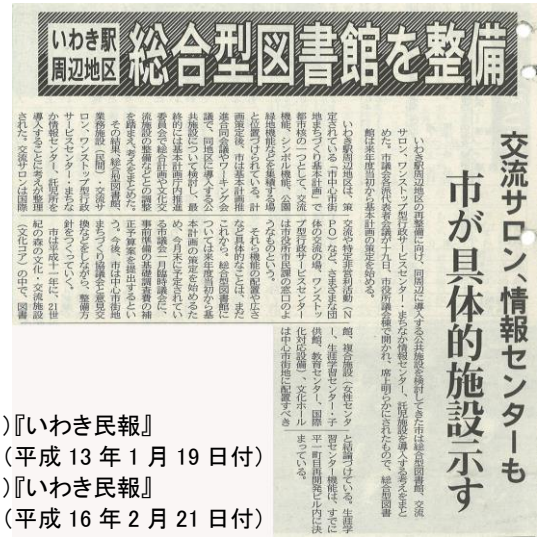
いわき駅前再開発ビルへの入居が公式に示されたのは、平成 13 年 11 月の「いわき市中心市街地街づくり協議会」との意見交換会でのことです。さらに、同年のいわき市議会 12 月定例会において、当時の四家啓助市長が行政報告のなかで、「総合型図書館と産業交流拠点施設を、いわき駅前再開発ビルに導入することが最善と判断した」と述べ、市は、翌平成 14 年度から総合型図書館の基本計画の策定を開始します。

また、平成 13 年 7 月には学識経験者などを構成員とした「いわき市総合型図書館整備検討懇談会」が発足、8 月には図書館司書などを中心としたメンバーを構成員とした「総合型図書館整備検討ワーキンググループ」を庁内に設置し、「いわき駅前地区市街地再開発事業」と連携を図りながら、事業化に向けたフロアレイアウト、蔵書計画、図書館情報システム等に関する検討結果をまとめます。

この時点では、いわき駅前再開発ビルは地下 1 階、地上 14 階の予定でした。このうち、図書館は 4 階から 8 階に配置されることになっており、5 フロア構成となっていました。

しかし、平成 14（2002）年 4 月のいわき駅前再開発に関する都市計画の決定により、再開発ビルは施設計画の大幅な見直しを行うことになります。この結果、平成 15（2003）年 11 月には、地上 8 階、地下 2 階の現在の形となります。再開発ビル施設計画の大幅な見直しに伴い、総合型図書館の施設計画も 5 フロア構成から 2 フロア構成へ変更するなど、幾度も計画の変更を経て、平成 17（2005）年 4 月、教育委員会事務局生涯学習課内に「図書館整備検討プロジェクトチーム」を設置します。図書や書架等備品の整備、新図書館情報システム構築・整備、運営体制検討等の供用開始準備に入りました。

平成 19（2007）年 5 月には、「いわき総合図書館」と名称が決まり、7 月には一部業務委託業者の公募を行います。9 月からは新図書館情報システム導入のため市内の全図書館を休館とするなど、総合図書館開館へ向けて一気に加速し、10 月 25 日、いわき駅前再開発ビル「ラトブ」の 4・5 階に開館となりました。平成 6（1994）年に「総合型図書館構想」を打ち出してから、13 年が経過していました。


いわき駅周辺地区 総合型図書館を整備

交流サロン、情報センターも

市が具体的施設示す

いわき駅周辺地区の再整備に向け、同周辺に導入する公共施設を検討してきた市は総合型図書館、交流サロン、ワンストップ型行政サービスセンター、託児施設を導入する考えをまとめた。市議会委員会基本計画の策定を始める。

いわき駅周辺地区は、策定されている「中心市街地まちづくり基本計画」で、都市機能シンボル機能、公園緑地機能などを備える場と位置づけられている。計画策定後、市は基本計画推進会議やワーキング会議で、同地区に導入する公共施設について検討し、最終的には基本計画庁内推進委員会と総合計画の文化交流施設の整備などとの調整を進め、今月末に決定されている。

その結果、総合型図書館、業務施設（託児）・交流サロン、ワンストップ型行政サービスセンター・まちなか情報センター、託児所を導入することに考えを固めた。

市は平成十一年に、21世紀の森の文化・交流施設として、交流サロンの活用

（交化コア）の中で、図書館、複合施設（女性センター、生涯学習センター・子育て支援センター・生涯学習センター・図書館）、平一町目再開発ビル内に決まっている。

交流サロンは、市民が集まる場、ワンストップ型行政サービスセンターは役所市民課の窓口のような機能、公園はいろいろな催しなどが行われる場、などを想定している。

「市中心市街地まちづくり基本計画」では、まちづくり協議会を基盤交換会をしながら、整備方針をつくっていく。

市は平成十一年に、21世紀の森の文化・交流施設（交化コア）の中で、図書館、複合施設（女性センター、生涯学習センター・子育て支援センター・生涯学習センター・図書館）、平一町目再開発ビル内に決まっている。

交流サロンは、市民が集まる場、ワンストップ型行政サービスセンターは役所市民課の窓口のような機能、公園はいろいろな催しなどが行われる場、などを想定している。

「市中心市街地まちづくり基本計画」では、まちづくり協議会を基盤交換会をしながら、整備方針をつくっていく。

市は平成十一年に、21世紀の森の文化・交流施設（交化コア）の中で、図書館、複合施設（女性センター、生涯学習センター・子育て支援センター・生涯学習センター・図書館）、平一町目再開発ビル内に決まっている。

上）『いわき民報』
（平成 13 年 1 月 19 日付）
下）『いわき民報』
（平成 16 年 2 月 21 日付）

総合型図書館は4、5階に

いわき駅前再開発ビル 市が配置計画発表

市は20日を後、19年度オープンを予定しているいわき駅前再開発ビルに導入する3公共施設の機能や配置計画を発表した。総合型図書館は4、5階、市民サービスセンターが5階、産業交流拠点施設が6階に決まった。

同ビルは8階建てで、公共施設の専有面積は約1万1800平方メートル、専有率は46%。総合型図書館は約9000平方メートル、産業交流施設が約2700平方メートル、市民サービスセンターが約1500平方メートルとなっている。

4、5階部分に入る総合型図書館は、「まち来たくなる」「みんなの役に立つ」「いわきを生き生きさせる」「未来の市民をはぐくむ」の四つを基本理念として、「みんなで育てる」図書館を整備の基本方向にした。

4階には一般図書ゾーンの「ポピュラーライブラリー」、子ども図書ゾーンの「児童ライブラリー」、読み聞かせなどをする「お話のへや」、新聞雑誌コーナー、自動貸出図書庫、対面朗読室、自動貸出室、グループ閲覧室、学習室、ボランティア室などが設けられる。

5階は郷土の資料を集めた「いわき資料」、参考図書ゾーンの「レファレンス書ゾーンの「レファレンス書」、貴重書庫、ライブラリー」、研究用パソコンコーナー、研究用個室などのほか、市と同様にボランティア室や対面朗読室などが備えられる。

蔵書数は今後検討されるが、将来は100万冊を目標にしている。蔵書数、面積とともに県内自治体ではトップクラスの規模となる。

市民サービスセンターは、戸籍届受け付け、住民異動届受け付け、各種証明書の発行などが主な業務で29事務を取り扱う。規模や業務内容は中央市民サービスセンターと同程度。開所時間はまだ決まっていないが、図書館の開館時間に合わせる。

産業交流拠点施設は、産業支援、新産業創造、産業交流機能を持つ。相談業務や起業家育成、産学官民連携の事業を展開する。展示会や見本市、大規模会議が行える企画展示ホール、企業情報や人材情報など産業に関する情報提供の場となる「産業技術情報プラ

右）ラトブオープン
（平成 19 年 10 月 25 日　いわき市撮影）

東日本大震災発生

平成 23（2011）年 3 月 11 日。金曜日の午後の図書館内には利用者がおり、読書や勉強など、いつもと変わらない時間が流れていました。

午後 2 時 46 分、突然、立っていられないほどの激しい揺れに襲われました。東北地方太平洋沖地震が発生し、いわき市は震度 6 弱を記録しました。館内では、書架から飛び出した本が散乱し、天井からは照明が落下、剥き出しになったコードからは火花が散っていました。

幸い、図書館利用者に怪我はなく、大きな混乱もなく館外に全員避難することができました。

地震発生後、図書館職員は避難所や安否確認窓口などの災害関係支援業務を優先しながら、落下した図書の整理や、破損資料の修理などを行いました。照明がなく暗いなかでの作業でしたが、ボランティアなどの協力もあり復旧作業を進めることができました。

しかし、4 月 11 日夕方に発生した震度 6 弱の余震で、書架に戻した本がすべて落下してしまいます。翌 12 日にも大きな余震があり、3 度目の落下。1 日も早い開館に向けて、復旧作業を進めていた矢先の出来事でした。その後も続く余震のなか、職員は懸命に復旧作業を進めました。

5 月 2 日、市北部を巡回する移動図書館「いわき号」が運行を再開しました。同じく 5 月 6 日には、市南部を巡回する移動図書館「しおかぜ」も運行を再開しました。

5 月 23 日、市内の図書館でも比較的被害が少なかった勿来、内郷、四倉図書館が再開、5 月 30 日には照明、空調の復旧工事が完了したいわき総合図書館が再開しました。

書架の転倒に加え、窓ガラスが破損するなど被害が大きかった小名浜、常磐図書館は 6 月 20 日に再開し、これで市内全ての図書館が再開しました。

震災後は、仮設住宅への移動図書館巡回ステーションの増設、避難者等への利用者登録の拡大、防災などをテーマにした講演会の開催、震災記録の展示など、震災の経験をもとに新たな図書館サービスを展開しています。

また、平成 24（2012）年 6 月には、震災資料の収集・保存のため、いわき総合図書館に「東日本大震災いわき市復興ライブラリー」を開設し、震災、原発事故に関する情報を発信しています。

左・下）3 月 11 日直後のいわき総合図書館。本はすべて落下し、書架の一部は転倒、照明もほとんどが落下した。

いわき総合図書館

待望の再オープン

震災で損壊の照明器具復旧

東日本大震災で被災し閉館していた、いわき市平のいわき総合図書館（ラトブ内）は五月三十日、再オープンした。開館を待ちわびていた市民らが次々と訪れ、お気に入りの本を手に取った。

同図書館にある二十七万冊の本は大半が棚から落ちた。天井からのつり下げ式だった照明器具約六百台が落下するなどして損壊。震災の復興作業の影響で、蛍光灯などの材料が供給不足になり復旧までに時間がかかった。

同図書館は地震対策として、つり下げ式の照明器具を廃止。地域資料などの書架には滑り止めシート約千枚を設置して落下防止を図っている。また、避難者に利用カードを発行するなどの支援サービスを開始した。

新妻秀次館長は「気軽に利用して、震災で疲れた心を読書で癒やしてほしい」と話した。

市によると、閉館中の小名浜、常磐の各図書館は書架の損傷が激しいため、六月中旬の再開を目標に復旧作業を急いでいるという。

『福島民報』（平成 23 年 6 月 2 日付）

左）東日本大震災いわき市復興ライブラリー